慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ビュズベック書簡集から眺めたシュレイマン一世のシェフザーデ事件
Sub Title	Kanni Suleyman's Sehzade : revolts seen in Busbeq's letters
Author	三橋, 冨治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.1 (1971. 11) ,p.47- 76
JaLC DOI	
Abstract	From Anadolu Seljuk period to Ottoman period, many rebellions by Moslem arose in the hinterland of Asia Minor. Thoe rebellions happened mainly in social economic crisis under the intense influence of the Dervish or Sufi. Toward the end of Kanuni Siileyman's reign,, which marked the zenith of the Ottoman Empire, rebellions having other motives happened, namely-so-called Sehzade's revolts. The later revolts originated from the palace-intrigue intertwisted with Ottoman ruling institution or Harem system as a background. From this view-point, the writer has aimed to indicate the unique character of Sehzade's revolts in comparison with Busbecq's letters. Not to mention, Busbecq was the Hapsburg's Imperial Ambassador at Constantinople (Istanbul) in 1554-1562. Besides much Turkish original materials, a certain number of important chronicles about Ottoman Turks have been compiled by some Western residents at that time. The writings of those men of various Western nationalities are sometimes more helpful for study than the documents of Turkish writers. Among those, long and interesting letters of Busbecq should be ranked first for Ottoman dynastic history and government itself. The charm of his style should not obscure the facts that he was sharp and exact observer possessing of a true scientific spirit, and that he reflected carefully on what he saw and experienced. He was a diplomatist, traveller, linguist, antiquarian, zoolozist and botanist. Accordingly, modern Turkish historians, for example, such as Prof. I. H. Uzuncarszili or Serafettin Turan, who are scholars in university, and some other scholars outside of university such ;as Mustafa Cezar or T. Y. Oztuna etc. estimate Busbecq's letters so high. As a whole this tendency is not altogether without reasons. So the writer tries to translate the original text concerning the above-mentioned subject and to research for the reality of Sehzade's revolts.
Notes	特集東西交渉史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19711100-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ビュズベック書簡集から眺めた
シュレイマン一世のシェフザーデ事件

三橋冨治男

一

十五〜六世紀は『トルコの世紀』と呼ばれるが、オスマン帝国はこの時点において、まさに発展隆昌の頂点に達した。ユーラシィア、アフラシィアの両側に跨る比類なき広がりをもつこのイスラム世界帝国の統帥者こそ、カヌーニ・スルタン・シュレイマン・ハン・ガーズイ（一五二〇—六六年）で統合と膨脹に特色づけられる半世紀に亘る支配期は、政治体制、行政管理面、法制面、軍事組織面、そのどれを取り上げてみても大成の域に達した時期であったといえる。トランジット貿易の利益と国内各種産業の発展に基いて巨大な富財をもち、或いはカヌーニ〔立法者〕或いは又ムフテシェム〔壮麗者〕と渾名されるこの帝王も専制支配の頂点に立つ者の常態として第三者的に眺めると権力保持のため王朝継嗣者に対して酷薄と思われても仕方のない行為を敢えてしたことがある。

シュレイマンに関する限り、むしろ稀有な異例事項と評されている。オスマン王朝の一族肉親の起した事件の処理は、異端外敵に対して寛大なる恩情を示した同一スルタンの所業とは思えないような苛酷な感じをすら抱かしめるのである。この稀有な事件として取りあげられるのが、晩年近くに発生し、しかも相互に微妙な内部関連をもつ一連の事件——シェ

フザーデ＝ムスタファ事件とバヤズイト事件であった。

まず以ってこの一連のシェフザーデ事件の基本性格を分析するに先き立って、トルコの史家は、一体どのように解釈しているかを一通り眺めよう。

この問題に関する研究者であるトルコ共和国の史家、例えば Şerafettin Turan（アンカラ大学）によれば、この事件を İsyan（反乱）の用語を以って総括説明している。(1)

抑々アナトリアにおける反乱といえば、"Anadolu İsyanları" という代名詞が生まれるくらい頻繁で、格別珍しい事柄ではなかったし、又時代的に眺めてもオスマン時代に限ったことはなく、小アジアにトルコ族が進出して以来のことでアナドル＝セルジューク王朝時代から頻発しているので事例は決して乏しくなく、むしろ数多く見出すことができる。たゞし性格的に眺めるとセルジューク時代に見受けられる地方反乱は、諸般の情勢から来る社会不安に乗じて、又社会、経済的危機に当面してデルヴィシュないしはタリカトに所属する宗教人、いわば民間における宗教勢力が指導する反中央権力的な村落農民や、遊牧民の一揆であった。誘因は、モーコの西漸、農耕地の荒廃、不作と飢饉、押し寄せる流民の群れ、通商の不安などで、デルヴィシュの統率者ババ＝イスハークの反乱（A. D. 1241）などが代表的な事例である。(2) イブン＝ビビの「セルジューク＝ナーメ」によればアナドルの天地を震駭させる大事件であった。

オスマン時代の東部アナトリアにおけるクズル＝バシの反乱などもシイア派の先鋒というレッテルを剝しさえすればまさにババ＝イスハークの反乱の様相を彷彿させる要素を秘めている。カヌーニ＝シュレイマンの治世の末頃からくすぶり始め、十六世紀末（一五九六年頃）からカラヤズズゥ（Karayazıcı）と呼ばれる有名な指導者のもとにアマスイア地方で勃発し、やがて殆んど凡ゆる住民層を捲き込んで、じめじめと長びく一括してジェラリー（Celâlî）の反乱と呼ばれるものも、国家経費の異常な膨脹とそれに伴なう増税、重税、アクチェ貨幣の急激な下落、小麦、綿などの生活必需物資の価値

高騰などのもたらす民衆生活への悪影響と悪循環とが誘因とすれば、やはりこのジャヌルに入るものと推測されてよい。[3] トルコ語では「ジェラリー」といえば、いつしか拡大解釈されて「国家に対して反乱を企てる賊党」の意味をもつことになる。[4] トヴェリテノヴァ（A. S. Tveritinova）の如きソ連の史家は、史的唯物論の立場から、この反乱の性格を規定して、中央集権体制の形成に伴って見られる封建的な反動といった紋切り型の説明で片付けているが、村落、小都市、首都などの住民の生活苦によるこのようなゲリラ＝パルチザン的心情のもとに勃発する地権保有者、管理者に対する一揆的な地域社会の反乱とは一応区別して、こゝで取り上げるような中央権力機構内部における対立勢力の闘争、政治事件としての反乱の様相もまた顕著といえよう。具体的にはŞ. Turanが慧眼にも指摘する如く非トルコ系すなわちカプクル＝デウシルメ出身の宮廷官僚群とそれに結び付くサライ＝カドウン（ハレム）対、これに反撥するトルコ系出自で地方封建領主の支持を受ける官僚群、それにシェイヒュル＝イスラムまで加わって繰りひろげられる相剋の様相がそれで、[5] そうした動きが偶々"Taht Kavgası"すなわちオスマン王朝の王位継承の動向と露骨に絡み合って反乱にまで発展する事例がシェフザーデ事件なのである。

とくに、それが偶々オスマン諸制度の完成期に当るカヌーニ＝シュレイマン時代に発生している事例として多大の関心と興味がもたれるのである。王位継承権をめぐっての紛糾が反乱につながるのがシェフザーデ事件とすれば、当然継承権とそのありかたについて一言触れる必要性が生じてくる。先ず以って言及しなければならぬのはオスマン王朝が初期には明確にして論争を許さぬ王位継承の規定を持ち合わせなかった事実である。最長子相続でなしスルタン男系子孫でありさえすれば誰もが有資格者であったことは、オスマン王朝の政治生活面において数多くの悲劇が生まれ出る根因となった。またこの点が野心的な策謀家に乗ぜられる間隙ともなった。すなわち前スルタンの逝去と共に次代スルタンの位を入手するために王子たちの間に激しい競合状態が現出し、幸にしてスルタン位を獲得した王子は自己の玉座の安泰を保証するた

めに同母系を含む他の王子のすべてを例外なしに除去する慣行が生まれた。このような Fatricide の慣行がカヌーンによって合法化されるのが第七代メフメット二世の時代である。見方によれば徹底した政治的合理主義の発露と云えないこともない。Alderson などの論述が夙に指摘するところである。(6)

註

(1) Şerafetttin Turan: Kanunî'nin Oğlu Şehzâde Bayezid Vak'ası. 1961. Ankara (Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi yayınları, No.80) S.2. 参照

(2) 拙著「小アジア（ルーム）＝セルジューク朝史研究のための本原史料と傍証史料」千葉大学「文化科学紀要」第二輯一九六〇年三月 p.6-7. p.15.

(3) Mustafa Akadağ: Celâlî isyanları (1550-1603) 1963. Ankara (Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi yayınları sayı 144) 参照

(4) ジェラリーという場合、ジェラレッティン＝ルーミの教旨を奉ずる者という意味もあるがこの場合そういう意味ではない

(5) Ş. Turan の著述については永田雄三「スレイマン大帝の王子バヤズイドの反乱」東洋学報第五十三巻第一号p.94～103. に要約されている。特に第三章、第七章について参照されたい

(6) A.D. Alderson: The Structure of the Ottoman Dynasty, 1956, Oxford, pp.25-31. 参照

二

茲に改めて喋々すべくもなくアナリアを根拠に発展をとげたオスマン王朝は、エルトウルル＝ベイから始まりアブドュル＝メズィト公が一九二四年に共和国政府によって追放されるまでトルコ族の上に君臨し、支配を続けた訳であるが、総じてオスマン王朝史とくにスルタンの本紀ともなれば、初期は別として、ディワーヌ＝ヒュマユーンの監督のもとにあるウァカニュウイス〔Vak'anüvis＝official Historigrapher〕ないしは、それに準ずるような立場にある御用学者群の陳述が中心となっている。

概括的に云うならば、オスマン王朝修史の典拠は、主に当代バーブ＝アリ〔オスマン政庁〕在職の高級官僚の書簡、スルタンへの上奏文、スルタンから下される詔勅類、ミュフティの発布するフェトヴァ〔Fetva 教書〕ないしはアヒト＝ナーメなどの外交文書等、いわゆる後世のトプカプ＝サライ文書が主体となる。これと一応対比さるべきものは、社会・経済・法制・宗教・海事関係の文書、その他以前はオスマン領、現在では独立国となっている諸地域の主要都市における文書、書類形式からいえば ㈠ Evrak ㈡ Defter (Mühimme-Defteri を含めて) ㈢ Kadastro[1] ないしは Tapu などを含むいわゆる後世の総理府文書である。

前者については Tahsin Öz「Tokapı Sarayı Müzesi arşivi Kılavuzu,」(Ankara『Belletin』XIV (1950) 後者については Bernard Lewis の「Başvekâlet Arşivi」(Encyclopaedia of Islam, 2nd Ed 1959, London & Leiden)[2] あるいは Midhat Sertoğlu の「Muhteva Bakımından Başvekâlet Arşivi」(Ankara 1955) などの分類と解題、解説がある。[3] いずれにもせよ、オスマン史を組み立て、或いはさぐる拠りどころとなっている。

だが宮廷修史官(ワカニュウイス)の職掌ともなれば、王朝本紀という、当代スルタンの行状・起居・業績を主題としての修史である。当り障りもあれば遠慮もある。ましてシュレイマンの如き不世出の大型君主ともなれば当然行為が批判の対象となるべき、又事態が非難さるべきような場合に出会うと、それなりに合理化・正当化を意図して適当にモデファイされる作意の跡も見られぬこともない。又時に様々の歴史事象を織り成す事件の本質がぼかされたり、敍述に手心が加えられたり、時に曲筆とまで行かないまでも敍述が平枚すぎて行動そのものゝ信憑性が判然としないことがありうる。このような面を明らかにして呉れる手掛りとしては欧州側の当代傍証資料が追及さるべきで、十六世紀の中葉、とくにカヌーニ時代を裏付ける点では、リバイヤーがその著『壮麗者シュレイマン時代におけるオスマン帝国の政府』(A. H. Lybyer, The Government of the Ottoman Empire in the time of Suleiman the Magnificent. 1913) の appendex で指摘するように、フィレン

ツェ、ヴェネツィア、ないしは神聖ローマ帝国の資料などが利用価値があり、例えばフィレンツェの資料としてはパオルス＝ギオヴィウス（Paulus Giovius）ヴェネツィアのそれには、マリノ＝ド＝カバルリ＝イル＝ヴェッチオ（Marino de Cavalli il Vecchio）ジロラモ＝フェルロ（Girolamo Ferro）などの Relazione[4] や神聖ローマ帝国のそれにはビュズベック（Ogiar Ghiselin de Busbecq1522-92）[5] の書簡集などがある。〔Ogier は又 Augier とも綴る〕

それらを対比する場合、オスマン宮廷事情に関する資料ではビュズベックのそれが一きわ群を抜いている。必要に応じてトルコ側の資料と照合してみると、点滅生起する事件の経緯やニュアンス、点綴されるエピソードの類が明らかにされるので便宜かつ重宝というべきであろう。例えばイスタンブルに所在する旧蹟や、寺院・庙の創建・沿革などについてエウレヤ＝チェレビイ（Evliya Çelebi）[6] が記述する論及などと対比してみると、史実の側面にあるさまざまな事象を浮き彫りにすることも可能である。ところでビュズベックの素性であるがこの人物は北海に臨む西部フランドル（現今のベルギー）で一五二二年ジョルジュ＝ギスラン＝セニョール＝ビュズベックを父として生まれ、カール五世やフェルディナント一世の信任をえて、神聖ローマ帝国ハプスブルク王朝の大使としてこの帝国を代表して一五五四年にイスタンブール（コンスタンティノープル）に派遣された外交官である。

その当面の外交的使命は、スルタンに働き掛けてハンガリー方面におけるオスマン軍団の掠奪を停止させることゝ、神聖ローマ帝国自体が新しい活動に備えてしばし休息する時間を稼ぎたいということにあった。ビュズベックは充分そうした希望を達成させることができたのみならず、トルコ人の性格をよく理解することに努め、トルコ人に対して多大の共鳴感をすら覚えるようになったのである。もとより、その際、真摯な行為に対する愛情、個人的な勇気、さらには不屈不撓の忍耐力がそうした理解に役立ったのである。彼は、諸般の学識に深く、古物学（今で云えば考古学）古泉学、金石学に通じており、さらに言語学や動植物にも造詣が深い人物で、直接シュレイマン一世治下のオスマン中央政庁とも接触、交

渉を不断に持った人物だけに在任中随時見聞した体験は真に貴重というべきであろう。その書簡集は、四通の長文の通信文より成るが、彼の門下で、当時イタリアに滞在し、後にポルトガル大使となるニコラス＝ミショ（Nicholas Michault）個人に宛てられたもので、ビュズベックは、自分の文章についてしばしば弁明している通り、古典的な引用句や論及を以って修飾される流麗なラテン文を駆使しており、決して公開される意図のものではなかっただけに機微にわたる事項が多く、しかも記述は極めて慎重にして客観性をもつ点から信憑性が高いものとの定評がある。

ビュズベックは、シュレイマンの移動に伴なって、特にアナトリアの境域を訪れる機会に恵まれ、例えば特に許されて、ユスクダル、カルタル、ゲブゼ、イズミト、イズニク（ニケーア）ブルサ、アンカラ、チョルム、アマスィア、その他の地域にも足跡を残している。この者が大使としてイスタンブールに在勤した任期は、一五五四年から六二年まで十二ケ年間で、後に転じてルドルフ二世の大使としてパリーにも赴いており、欧州史のうちでも重要期におけるフランスの情況について興味ある報告を寄せている。やがて一五九二年に皇帝から賜暇休暇を取って郷里に帰り、同じ年の十月二十八日に七十一才で、サンジェルマン近傍のメイヨで逝去している。茲で論題の中心となるべき、彼の書簡集のテキストについては、一五八一年アントワープで刊行された「Itinera Constantinopolitanum」が最も古いが、これは第一の書簡のみしか載録されていない。(7)

四つの書簡すべてが載録されているのは、一五八九年のパリー版で、ラテン語よりのドイツ語訳は一五九六年、フランス語訳は一六四九年にあらわれ、英語訳は一六九四年まであらわれない。一六九四年の英訳本のタイトルは『The Four Epistles of A. G. Busbequius, concerning his embassy into Turkey』となっている。以来二十七の刊本ないし複刻本が世に出ており、七ケ国語に翻訳されている由である。一七五八年のブダペシト版テキストも時に引用される刊本である。

近代訳本としては C. T. Forster & F. H. B. Daniell『The life and letters of Ogier Gehiselin de Busbeeq, 1881,

London』があり、A. H. Lybyer が『The Government of the Ottoman Empire in the time of Suleiman the Magnificent 1913, Cambridge』にてしばしば論証のために本文において脚註において利用しているのはこの刊本である。なお脚註としては、Gibbon, Motley, Robertson, Burton などの著作のうちでも見出される。

茲では、最新の刊本ともいうべき、Edward Seymour Forster の『The Turkish letters of Ogier Ghiselin de Busbecq, Imperial Ambassador at Censtantinople, 1554-1562, 1968. Oxford』を底本に用いた。

原来、ビュズベックの書簡集は、ラテン文テキストそのものに異同が長出される由であり訳本においても内容的にも若干の章句に喰い違いや、文脈に繁簡が見出されるが、茲では必要に応じて、省略部分はトルコ語訳本、例えば、H. C. Yalcın の『Türk Mektupları, 1939, İstanbul』を参照し乍ら補正を加えて利用したことを前以って述べておき度い。

註

（1）Cadestre 古代ギリシア語の Katastichon から由来する。フランス語やイタリア語では Catastro. 古いイタリー語では Catastico である。意味は税金の割り宛てに用いられる実際の領地の面積、価値及び所有についての公式の登録をさす、トルコ語のタプウとは同一の語義をもつものと理解される。

（2）Vol I, Fasc, 18, p.

（3）Claude Cahen: Jean Sauvaget's introduction to the History of the Muslim East. A Bibliography Guide, 1965, University of California-Press, pp. 193-194. 茲では P. Wittek の「Les archives de Turquie, Byzantion XIII 1936. をも掲げている。なお上掲永田論文P. 97参照されたい。

（4）上掲 Şerafettin Turan: Kanunînin Oğlu şehzade Bayezid Vaka'sı S. 4. 参照。

（5）なお個有名詞としての Busbecq の正確なる発音であるがブスベックかビュスベックかビュズベックか、茲では Webster's Biographical Dictionary の表音 büz'běk' に従ってビュズベックと読んでおく。

（6）エウリヤ・チェレビイについては拙稿「エウリヤ・チェレビイに関する断章」「オリエント」Vol XI. Nos. 3-4. pp. 91-103. 1968 参照

（7）Nicholas a Moffan: Soltani Solymanni Turcorum Imperatoris harrendum facinus, 1555 と対比されている。

三

十六世紀中葉におけるオスマン＝トルコの複雑な政治的な内情にや情況判断にまでつながるような貴重な知見で克明に伝えて呉れる意味で注目に価いするビュズベックの長文の通信を訳述し評価するにさき立って、まず以って茲で所与の命題の核心に焦準を合わせるためシュレイマン時代の不祥事ともいうべきシェフザーデ事件の輪郭、ないしはその歴史背景のあらましを眺めよう。

十五世紀中葉から十六世紀中葉に掛けてオスマン帝国はコンスタンティノープルの攻略、エジプトの併合、ロードス島やブダペシトの陥落などを成就した。この「上げ潮」期の帝国の政治的命運を一身に担ったシュレイマンも寄る年波には勝てず老境に入るにつれて起った現象は、スルタン相続に関するカヌーン〔法規〕が判然としないまゝにオスマン王朝内部で相続問題が諸王子たちの最大関心事として不安の種を播いていたことである。東方宮廷における政治的陰謀の典型的悲劇ともいうべき、これから述べようとする事件が発生する時点において、シュレイマンは既に還暦を迎えていた。ヒジュラ暦の九六〇年（西暦一五五三年）には、長子のムスタファ、次子セリム〔後のセリム二世〕、第三子バヤズイト、第四子ジハンギルなど生母を異にするシェフザーデ、つまり後継候補たるべき王子があった。ムスタファは三十九才、セリムは三十才、バヤズイトは二十八才、ジハンギルは二十三才であった。この中、にムスタファは、コニアの知事職〔カラマンのサンジャクベイ〕にあり、父帝シュレイマンが若年でマニサのサンジャクベイの頃[1]、一五一五年に生まれたが容貌も体軀も祖父のセリム一世（ヤウーズ）に生写しと云われていた。

ムスタファはよい教育を受けた事情もあって、道義心が厚く、真面目かつ天性の資質の故にイエニ＝チェリからも一般知識人からも敬愛されていた。年配からも、周囲の状況からも次期スルタンとして最有力視されていた。だがシュレイマ

ンの寵妃ロクソラーナ＝フルレムは頗る不満とした。というのはこの寵妃はシュレイマンとの間に四人の王子セリム、バヤズイト、メフメット、ジハンギルと一人の息女ミフリマを儲けており、王子の一人を世継ぎに仕立てたい強い念願に炎えていたからである。そのうちメフメットは夙に一五四三年、マニサのサンジャクベイの職に在任中に逝去し、イエニ＝チェリの古参兵の手で手厚く葬られ、墳墓には「シェフザーデ＝ジャミー」名称で有名なモスクとメドレセ、イマレットなどが建立された。

以後、ロクソラーナは残った三子のうちバヤズイトを最も鍾愛し、次期スルタンに推すための政治的暗躍を開始した。

男性の宿命か、聰明なる筈のシュレイマンもいつしか美貌にして会話の巧みなこの寵妃の影響下におかれることゝなった。

茲に宮廷悲劇の大きな種が播かれる。ロクソラーナは我が子バヤズイトを世継ぎとするためには、その前面に立ちふさがる他の寵妃の生むムスタファという邪魔者の排除が必要であった。

しかしながら時のサドラザム（大宰相）、イブラヒム＝パシャがムスタファを強力に支持している事情にかんがみ、この大宰相と対立する政治的党派と結んで、イブラヒム＝パシャをその座から追い出すことに成功した。次いでロクソラーナはムスタファを追い落すための行動を着々と進めた。

例えばマニサ＝アイドンのサンジャクベイ職に就任したムスタファをアマスイアに、ついでコニアに配置換えし、しかもセリムをマニサの、バヤズイトをキュタヒアのサンジャクベイ職に就任させることに成功したのがそれである。

この時点で宮廷に於いて収受する文書の整理を担当するキュベ＝ウェズイル（註＝次席大臣）ダマト＝リュステム＝パシヤが奸策の遂行に重要な役割を演ずる。これを要するにオスマン宮廷におけるデウシルメ出身官僚[2]とハレム勢力の癒着が示される。リュステム＝パシヤは、シュレイマンと寵妃ロクソラーナとの間に生まれた唯一人の息女ミフリマの女婿であった。

理財の才があり乍ら気骨に乏しいリュステムは渦中に引き込まれた。ムスタファを窮地に陥れるため王子の筆蹟に似せた偽筆の書簡を作成して偶々交戦中のイランのシャーとひそかに内通しているかの如く事実を歪曲した。

その頃シュレイマンは親征することなく、トランシルヴァニア問題に関連してハンガリー方面への遠征には、次席大臣のカラ＝アフメット＝パシャを派遣し又、東方属州に脅威を与えるシャー＝タフマスプに対してはサドラザムに新たに昇任したリュステム＝パシャを派遣して指揮に当らせたのである。

リュステム＝パシャは出動して東方に向う途中アクサライ〔コニアの西部中部アナトリア〕の地においてイエニ＝チェリがムスタファの側に傾いており、高齢のゆえに遠征に参加しないスルタンの心境に慊らずこの王子の擁立を考えているとの風聞を耳にすると、シィパーヒの隊長クズル＝アフメットの随員のうちから、シエムスイ＝アーとチャウス＝バシを選んでイスタンブールに急派して、この旨を報告すると共にスルタンが親征の形で兵士の先頭に立つように要請し、アクサライから前進することなく命令の来着を待った。

シュレイマンはこの報道を受け取るとリュステム＝パシャを召還し、一五五三年八月末頃、イランへの親征に出発した。留守中の措置としてキュタヒアの知事職（ゲルミアンのサンジャクベイ）にある王子バヤズイトをルメリー方面の守備に就かせるためエディルネに駐留させた。スルタンがボルワァデインに到着した際サルハーンの知事職（マニサのサンジャクベイ）にある王子セリムは急遽馳せ参じて忠誠を誓った。

カラマン＝エレウリ近傍のアク・テペにまで進軍した時、イランとの対戦の当面の司令官たるムスタファが合流するために到着して帳幕を張った。慣例に従って翌日スルタン側近の高級吏僚がムスタファに敬意を表するために帳幕にまで出向して挨拶を交わした。答礼のためムスタファはディワーン＝ハネ〔幕僚会議室〕に宛てられた帳幕に赴き大臣たちに挨拶を行なって後、玉座のある帳幕にまで案内された。帳幕のなかに入ったところ肝腎の父帝の姿は見あたらずとまどった瞬間七

名の唖者〔註―死刑執行人〕が王子に向って跳り掛って首を縊ろうとした。ムスタファは虎口を脱すべく身をかわす時、宮廷宦官のザル＝マフムト＝アーが背後からムスタアを襲って縊死させた〔註―ブルサにあるジェム＝スルタンの墓処に葬られた〕。

ムスタファの処刑を耳にしてイエニ＝チェリたちは騒然となった。この措置の非を鳴らしリュステム＝パシヤの所罰を要求して蜂起したとの報告を受けたスルタンは、イエニ＝チュリたちを慰撫する必要から、やむなくリュズテム＝パシャの罷免を認め、代って次席大臣のカラ＝アフメット＝パシャを昇格させ、新大宰相に任命して事態を収拾せざるをえなくなった。働き盛りの王子ムスタファの不慮の死は長い間人々の脳裡から去らなかった。印象的なこのいたましい処刑に対して詩人のタシルジャル＝ヤフヤ＝ベイ〔註―シャー＝ワァ＝ケダの著者〕か極めて悲哀に満ちた切々たる哀悼の詩を書き綴っているがこの詩は兵士の間で人気があり、ひろく愛誦されたものゝ如くである。

このムスタファ殺害事件の悲劇的結末について深甚なるショックを受けたのは末の王子ジハンギルであり、性来感受性の強い詩人肌のこの王子はショックが原因で病気となり一五五三年十一月北シリアのアレッポで逝去した〔註―イスタンブールのシェフザデー大寺院に葬られた〕。残るは、ロクソラーナの生んだバヤズイトとセリムの二王子だけとなったと伝えられている。

両親を同じうする兄弟でありながら、バヤズイトはどちらかといえば、気質は父に似ており、そのために母からも非常に愛されていた。セリムの方は性質が母に似ており従者や宮廷高級吏僚から愛されていた。

王子ムスタファ事件以後、バヤズイトは次期スルタンは当然自分であると判断した。

一五五七年にメッカのアミールのもとからイスタンブールに派遣されたクトブユッディン＝エル＝メッキが、キュタヒアを通過する時同地でバヤズイトと会見しているが、この王子の並々ならぬ希望と意志の程を書き誌している。もしもロクソラーナが健在であったならばこの希望が達成されたかも知れない。

一五五八年二月ロクソラーナは逝去する前に息子たちのうちの一人を選ばなければなるまいと心に決めていた。だが母

の逝去は兄弟の抗争を愈々激しくした。突如としてスルタンは、セリムをマニサからコニアに、バヤズイトをキュタヒアからアマスイアに配置替えを命じた。

バヤズイトは頗る不本意で赴任を渋ったがセリムは直ちに命令に服した。両兄弟の間で紛争が生じないように、セリムには大臣のソコルル＝メフメット＝パシヤが、バヤズイトにはペルテウ＝パシヤが〝附け人〟となった。スルタンは更に釘をさす意味で、もし両名のいがみ合いが激しくなる場合世継ぎには妹ハーディジェ〔セリム一世の娘〕の一子オスマン＝シャー＝ベイ〔モレアのサンジャク＝ベイ〕を推すであろう旨の威嚇的言辞をも弄した。

この事態の推移は、これより先、一五五五年に上述のムスタファ事件で責任を取らされて罷免になったリュステム＝パシヤがロクソラーナの執りなしで再度大宰相に返り咲いたことと因果関係があった。

というのは、このことがリュステム＝パシヤの政敵で、智謀にたけたララ＝ムスタファ＝パシヤをセリムの側に立たせる結果をもたらしたからである。

目的達成のためララ＝ムスタファ＝パシヤは従前王子バヤズイトの輩下にあって信頼を得ていた事情を逆用した。離間策としてララ＝ムスタファ＝パシヤはバヤズイトを欺瞞する書簡を書き送りその都度受け取った返信を一々スルタンのもとに提示する形でバヤズイトを陥れたのである。バヤズイトは友情感からララ＝ムスタファ＝パシヤを疑う心なく深い信頼を寄せていたので凡ゆる機微にわたる事項を打ち明けて誌したのである。

このような忌憚のないバヤズイトの書簡はシュレイマンに筒抜けとなった。

「我が子バヤズイト＝ハンよ、兄弟と不和と確執とをやめることが希望達成の手段である。我が祝福を欲するならば、この見苦しい有様について反省せよ」

といったスルタンの忠告をまじえた命令も、ララ＝ムスタファ＝パシヤの腹心が途中で横取りして王子に伝達することな

く、又一方バヤズイトから父スルタン宛ての弁明書もララ＝ムスタファが横取りするといった奸策は、バヤズイトを愈々不利な立場に追い込んだ。上述の両王子の配置換えにはそうした内情が秘められていた。

このような共同謀議についてリュステム＝パシヤが感知していたとしても、彼自身、前述ムスタファ殺害事件でのうしろめたさがあるためバヤズイト弁護のために何ら有効な手を打てなかった。

むしろシュレイマンは大宰相リュステム＝パシヤがバヤズイト王子を使嗾しているという告げ口をララ＝ムスタファ＝パシヤから聞かされている状況では所詮、弁護を試みたところで受け容れまいという特殊事情もあった。

母后の逝去後、スルタンの側近で危険極りない策謀が進捗しつゝある事情を知ってバヤズイトは保身のためキュタヒアで傭兵団を組織して兄セリムの任地コニアに向って進撃した。父帝の側からすれば、まさに叛逆であった。

反乱鎮圧にためソコルル＝メフメット＝パシヤが乗り出し、こゝにコニアでの決戦が織りひろげられた。時に一五五九年五月三十日から三十一日であった。

バヤズイトは、緒戦に勝利をおさめたとはいえ武運拙く敗れて根拠地アマスイアに向けて逃亡した。

この王子はララ＝ムスタファ＝パシヤが自分を陥れたことについて弁明し陳謝の意をこめて父帝宛てに詫状を差出したが、これも又、途中でララ＝ムスタファ＝パシヤの手に渡って破棄されてしまった。

結果的に苦悩を父に訴えるすべを失ったバヤズイトは、四人の子息〔オルハン、オスマン、マフムト、アブドュル〕をしたがえて千余名の配下とイランに向け出奔した。

出奔する一行は背後から烈しく追跡されはしたが、捕まりはしなかった。

エルズルムのベイレルベイ職のアヤス＝パシヤは、バヤズイト逮捕の命令に反して、この薄命の王子を見逃したばかりか、蹄鉄や釘などを与えたというかどで処刑される一幕もあった。

バヤズイトは、アラスの城市近傍で述跡者と一戦を交え彼らを打ち敗って後、イラン領に入り、レヴァンの知事シャークル＝スルタンの館に辿りついた。時に一五六〇年五月であった。

シュレイマンからは、イランのシャー＝タフマスプに対してバヤズイトの引き渡しないしは処刑執行を要請すること三回に及んだ。シャー＝タフマスプに対しては可成り多額の金品が贈与された。セリムの側からもスルタンの位をねらう対立者を取り除くためシャー＝タフマスプのもとに使者と贈り物とが届けられた。ついにシュレイマンの命令でヴァンのベイレルベイ職にあるヒュスレフ＝パシヤとそれにセリムの側から派遣されたチャウシュ＝バシ職アリ＝アーらより成る使節団が、シャー＝タフマスプを説得してバヤズイトの身柄を受取りカズウインで四名の子息と共に処刑した。遺体はアナトリアに運ばれてシヴァスに葬られた」……以上が一連のシェフザーデ事件の輪郭で、イスマイル＝ハック＝ウズンチャルシュル（İsmail Hakkı Uzunçarşılı）教授の労作『Osmanlı Tarihi』（Türk Tarih Kurumu, yayınlarından XIII. Seri-No. 16. Ankara 1964.）Şehzadeler Vak'ası S. 401-408 を典拠として概述したものである。

註

（1）サンジックはオスマン地方行政組織の単位、ベイはこの単位での太守、軍政官を意味する。

（2）拙稿「オスマン＝トルコのデウシルメについて」史学雑誌第七十二編七号参照。

四

まず、第一のシェフザーデ事件―ムスタファの場合、ビュズベックは、どのように自身観察していたか？　彼の一五五五年九月一日々付、ウィーンからの長文の書簡（第一信）によって点検しよう。以下は関係部分の逐字訳である。

『……私〔ビュズベック〕は一月二十日にコンスタンティノープルに到着した。スルタンは軍団と共にアジアに赴いていたので、知事、宦官のイブラヒム＝パシヤ、それに今は高い地位から逐われたリュステム〔＝パシヤ〕以外には誰一人として首都には残留していなかった。

そうした事情にもかゝわらず、私共は従前の偉大な勢威を思い浮かべて、また速やかに復活を念願している事情にかんがみて、リュステムを公式に訪問し、彼に挨拶を行ない贈り物をした。何故にリュステムが高い地位から逐われたか、この点について論及する余裕はない。

シュレイマンは、もし私に誤りがないとすればクリミアから来た愛妾から一人の王子を儲けていた。その名はムスタファであった。この王子は当時、生涯の全盛期にあり、武人として高い名声を博していた。だがシュレイマンはロクソラーナから別の数名の王子を儲けていた。ロクソラーナに対してスルタンは格別愛情を寄せていたので、トルコ人の間で合法的な結婚の最も確実なる誓約である行為、すなわち彼女に正式の妃たる位地をあたえ、かつ結納金を贈っていた。こうした行為によってシュレイマンは、先行する諸スルタンの慣行を破った。

バヤズイト一世以後、結婚の誓約を取り交わしたスルタンは一人もいなかった。かのアンカラの戦いに敗れ王妃と共にチムールの掌中に落ちたバヤズイトは、数多くの忍び難い苦痛を味わったが、自分の目の前で妃が味わされた侮辱や屈辱ほど自尊心を傷けられたことはなかった。このことを深く念頭においてバヤズイト一世の後を受け継いだスルタンたちは正規に妃を娶ることを見合わせたのである。それ故、如何なる運命に見舞われようとも同じような不運な目には会うまい、奴隷の身分の女性から子供を得ることだけならば、彼女の味う不名誉は正規の妃の場合よりはひどくないと考えられていた。トルコ人は、実際に妾腹から生まれた子供を正妻から生まれた子供より低いものとは考えていないのである。前者は相続についても平等の権利を保有するのである。それはさて措き、天性具わった才幹と年齢のふさわしさからいってムス

タファ〔シュレイマンの王子〕は、兵士の愛情を一身に集め、既に老境に達した父帝の確実な世継ぎの君とて民衆の衆望をも担っていた。反面ムスタンファの継母〔ロクソラーナ〕は自分の腹を痛めた息子のために玉座を確保しようと最大の努力を傾け、ムスタファの美点と長子としての権利を、正妃たる権威を主張することによって相殺しようと試みた。彼女は目的を果たすためにルュステム〔パシヤ〕の助言と協力とを求めた。

リュステムは彼女の息女、つまりスルタンの娘〔ミフリマ〕との結婚によって、彼女の運命と密接につながっていた。そこで双方の利害は一致した。何はともあれ、リュステム＝パシヤはスルタンに対して影響力と威信とをもっていた。彼は明敏にして先見の明のある人物で、シュレイマンの名声を高める上にも大きく寄与していた。もしも貴君〔ニコラス＝ミショ〕が彼の素姓を知りたければ家柄は豚飼育者であった。だが彼については卑劣な強欲という汚点さえなければ高官にふさわしい人物であった。

この卑劣な強欲という点がスルタンの懸念をひきおこした彼の唯一つの品性であった。

もしそうでなければスルタンの愛情と賛同を受けていた筈である。彼のこの悪徳でさえ君主の利益のために用いられていた。というのは宮廷財政の処理や理財の才にかけては信頼されていたからである。この点はシュレイマンには可なりに手であった訳である。

行政管理面においてリュステム＝パシヤは、仮え小額とはいえ、スルタンの苑地に栽培される野菜・薔薇・すみれなどを売却し金銭をかき集めることさえするなど収入の財源をゆるがせにしなかった。リュステム＝パシヤは捕虜のかぶと、胸当て、馬匹のばら売りまでした。しかも彼は同じ原則であらゆるものを処分した。結果は巨大な財力を蓄えてシュレイマンの国庫を充たすことゝなった。

扨てトルコのスルタンの息子たちの地位はきわめて不幸なものである。というのは王子の一人が父帝の後を継承するや

否や、ほかの王子は不可避的に死に逐いやられるからである。トルコ人は玉座への競争相手は容赦しなかった。疑いもなく、スルタンの親衛軍団〔イエニ・チェリその他カプクルの軍団を指す〕の態度が容赦することを許さなかった。というのはもしも君臨するスルタンに兄弟が生き残っていたとすると、親衛軍団は絶えず贈物〔バフシーシ〕を要求し、もしもその要求が拒絶されるような場合には「兄弟万才、神よ兄弟に加護あれ…」の叫びが聞かれ、それによって彼らは兄弟を玉座につけることが可成りはっきりしていたからである。

かくて、トルコのスルタンは、兄弟の血を以って自分の手を汚がし、殺人を以って統治を始める。ムスタファがこのような運命におち入ることを恐れたゝめか、はたまたロクソラーナがムスタファを犠牲に供することによって自分の腹から生まれた王子たちを救けようとしてか、いずれにせよ、彼らのどちらかがシュレイマンに対して息子を殺害する気持に仕向けたことだけは確かである。

スルタンがペルシア王のサグターマとの戦いに入るとリュステムは、総司令官として対抗するように派遣された。リュステムがペルシアの国境に接近した時、突然、進軍を停止して自分が危険な状態におかれていること、反逆が頻発していること、さらに兵士が買収されて王子ムスタファ以外の何人をも欲していないことなどを知らせるためにシュレイマンのもとに使者を派遣した。リュステムはたゞスルタンだけが必要とする権威をもっていること、彼自身では事態に対処できないこと、スルタンの出御と威光とが必要であること、もしもスルタンがみずからの玉座を守りたければ即刻出馬せねばならぬことをも附け加えた。

この情報に驚いたシュレイマンは、当該地点まで急行し、ムスタファに対して彼が疑われており、しかも公然告発された罪状に対して身のあかしを立てなければならないこと、もし彼が呼び出しに応ずるならば、その身辺を脅やかされる危険はない旨の書状を書き送った。

ムスタファは難かしい選択に迫られた。もしも立腹し感情を害した父帝の面前に立つならば疑いもなく危険であった。もしも拒否すれば反逆行為を企てたことを自認したことにある。彼は、より勇敢にして、より危険な途の方を選んだ。彼の政庁の所在地アマスイアを立ち出でて、それ程遠くない父帝の帳幕を探し求めた。彼は、或いは邪心のないことを頼りにしてか、或いは又、軍団の面前では危害が加わられないと確信してか、どちらかであった。それはともあれ、彼は、まさしく死地に赴いたのである。シュレイマンはムフティ（我々の間でのローマ教皇に匹適するような重要な宗教上の権威者）の忠告をまっさきに受け入れてイスタンブールを出発する前から息子の処刑を決意していた。それというのも宗教上の命令を無視したように見られたくなかったからである……

（トルコ語訳本では、この文章の次に下記の如き寓話が挿話が挿入されている。一九六八年版英訳本では省略されているが、この論考では特に重要な個処であるので補足する）

シュレイマンはムフティ〔シャイヒュル・イスラム〕にムスタファとははっきり名指さないで次の如き寓話（つくりばなし）を聞かせた。イスタンブールにさる裕福な商人があった。長途の旅行に出る必要が生じて家族・妻・子供と一切の仕事の管理を一人の奴隷に委ねた。この者の友情に全幅の信頼をおいたのである。奴隷は主人が出掛けるとすぐに自分の保護のもとにおかれた主人の妻子を無きものにし、財産を入手するため、もしもそうすることが出来るならば主人の生命までも絶とうと決意した。シュレイマンはこの寓話を聞かせ後にムフティに云った。このような奴隷にカヌーンはどのように適用さるべきか？」と。

ムフティは「死刑に該当する」という回答を与えた。本当にこのような意見が述べられたものか〔そうは思われないが〕リュステムあるいは、ロクソラーナに気兼ねして本当の意見を秘したものであろうか？　それは兎も角シュレイマンが息子を殺害しようという決意は、このあたりから極めて強く割り出される。というのはムスタファ自身に対しての考え方が、

こゝに指摘される奴隷の罪状にまで拡大されたからである。

（陳述は以下につゞく）

さて陣営にムスタファが到着すると、兵士の間には可成りの興奮がみられた。彼は父帝の帳幕に案内された。すべては平穏裡にあった。兵士の姿も見あたらなければ近侍、召使の姿もなかった。陰謀の恐怖など何処にも見出せなかった。だが数名の唖者（トルコ人に重んぜられる召使いの階級）で屈強な者共―殺害者となる筈の者共―がそこに待ち受けていた。ムスタファが帳幕のうちに入るか入らぬうちに彼らは襲撃してきて懸命に彼の首筋に紐を掛けた。堂々たる体躰のムスタファは頑強に身を守り、自分の生命のためばかりでなく玉座のために闘った。というのは、もしムスタファは虎口を脱することができ、しかもイエニ＝チェリの間に身を投ずることがあるならば、〝お気に入り〟の王子のために憤りと憐みを以って心情的に動かされて、彼を庇護するばかりか、彼をスルタンと宣言することは疑いを入れなかった。このことを惧れてシュレイマンは、この悲劇の行われる場面から僅かにリンネルの帳幕のチャドルでへだてられた場処におり、計画の実行がおくれる場合には、自分がひそんでいるところから頭を出して唖者たちに荒々しい脅しの一瞥を呉れて、脅威を加える物腰で厳しく狐疑逡巡を督励するつもりであった。この様子に恐れをなして唖者たちは努力を倍増して不幸なムスタファを地面に投げつけ、彼の頸のまわりに弓の弦を巻きつけて絞殺したのであった。ついで遺骸を小型の絨緞の上に載せて帳幕の前にさらしたので、イエニ＝チェリたちは自分がスルタンにもり立てようとしたその人物を見おろすことになった。報道が宿衛地にひろまった時には、憐みと悲しみとが全軍団にわきおこった。

そして赴いてこの悲しい光景を目のあたり眺めようとするものは誰一人いなかった。最も衝撃をうけたのはイエニ＝チェリたちであった。ムスタファが統帥者でであっただけに驚きと怒りはひどかったので、どのような行動をとろうとも止められるものでなかった。というのはイエニ＝チェリたちは指導者と仰いでいる者が地上に息絶えて横たわっているのを

見たからである。心に浮かぶ唯一つの道は、いやし難い忍耐の心を以って耐えしのぶことだけであった。悲しみ黙して目に涙を浮かべて彼らはそれぞれの帳幕にひきあげて気の済むまで自分たちの薄倖でお気に入りの王子を弔んだのである。

はじめ彼らはシュレイマンを気の狂った耄碌老人として非難の声をあびせた。ついで彼らはムスタファの継母〔ロクソラーナ〕の奸智と残忍、彼女と手を組んでオスマン王家の最も輝やかしい星を死にまで追いやったリュステム＝パシヤ〔大宰相〕を罵った。イエニ＝チェリたちは断食して、水を呑むことなく日を送った。のみならず何日も何日も食事を取らぬ者もあった。数日の間、宿営地は全軍哀悼のうちに終始した。もしもシュレイマンがリュステム（恐らくみずから示唆したものと思われるが）の高い官職を奪い、無役でイスタンブルに送還しなければ兵士たちの悲しみと歎きとは果てしないように思われた。このような動きの裡にリュステムが大宰相の時代に、次席の大臣であったアフメット＝パシヤは決断の人というよりは、むしろ勇気の人であったが、後任の大宰相に選出された〔幾もなく失脚〕。

この更迭は、シュレイマンがリュステムの罪状と、妃の奸智を知り、時期がおそきに失したとはいえ、リュステムを退けイスタンブールに帰還次第、妃の方も容赦すまい、という英知を学んだとして、俗人の軽信というか、物事を信じやすい兵士の哀しみの情を和らげた。

だが私〔ビュズベック〕は、茲で本来の主題に立ちかえらなければならない…」云々と陳述している。

以上知られるように、この種の国家的重大事件に関する情報根源やルートがが如何なるものであったか、経路を辿ることは至難であるが、それは別として情景を目のあたり眺めるような生彩ある表現が見出されるのみならず人間関係の機微に触れ、諸般の事情についても仲々うがった見方をしているのが特色である。茲にビュズベックの第一の書簡について要約して云えることは、

(1) 宮廷ハレム勢力の中心ロクソラーナ＝フルレムが単なるスルタンの寵妾でなく、慣例に反して異例的に正妃として待遇されていること。それとの関連においてオスマン王家が王妃を立てなかった心情。

(2) ロクソラーナが自分の腹を痛めたバヤズイトに次期スルタンの位を継がせたいためデウシルメ出身の官僚群、その代表人物ともいわるべきリュステム＝パシヤと結びついた成行、さらにロクソラーナが直接にスルタンに政治的な影響を与えた事情。

(3) スルタンの親衛歩兵軍団であるところのイエニ＝チェリ部隊を心服させ掌握した王子ムスタファに対してシュレイマンは猜疑心と警戒心をつのらせ、ことによると自己の保有する大帝国を奪われ幽閉されるか知れないといった途方もない危惧の念を抱いていた事情。

(4) シュレイマンの治世には未だ隋落することなく士気旺盛、健在であったイエニ＝チェリがムスタファの側に立ってその支持者であり、むしろ心情として反スルタン的であったこと。このことはムスタファの不慮の処刑に対して測り知れない悲哀の意を表明した事実でうかゞい知られること。

(5) この頃のイエニ＝チェリは一般通念のように必ずしも常住デウシルメ出身官僚や、ハレム勢力と結びついて、傀儡ないし番犬たらんとするものでないこと。統帥者に対して絶大な親愛の情をもつ例証を示していること。

などが判明するのである。

五

次に一五五六年七月十四日々付コンスタンティノープルからの長文のビュズベック書簡（第二信）はシュレイマン時代のいま一つのシェフザーデ事件、バヤズイトの場合について次に掲げるように触れている。

「……貴君〔上述ニコラス＝ミショ〕はバヤズイトについての情報を欲しがった。茲にそれがある。だが私の説明を一層明瞭にするためシュレイマンの家族構成について既述した事柄を繰りかえさえなければなるまい。

このスルタスには五名の子息があった。最年長のムスタファ〔上述〕はクリミア出身の妾腹から生まれ、他の四子―メフメット、セリム、バヤズイト、ジハンギルはスルタンが正式に結婚したロクソラーナから生まれた。メフメットは一人の妻（トルコ人は妾にこの名称を与えているが）持ち若年にして世を去った。

セリムとバヤズイトは健在であった。最年少の子息ジハンギルは次のような事情で死去した。ムスタファが処刑されたとの情報がイスタンブールに届くと心理的にも肉体的にも健全でないこの不幸な若者（彼はこぶで体軀が曲っていた）は自分に対しても類似の運命が待ち受けていると感じたので非常に驚愕した。彼は父帝が在世中は、邪魔にならないで放置されていることだけを念願した。父帝が埋葬された時それが誰であるにもせよ後継者の即位は自分の死と一致する。兄弟の誰もが容赦はすまい。すべてが一様に玉座の競争者として滅ぼすに相違ない。しかも、それらのうちには自分もはいっているのだ。このような観念は今直ちに処刑執行の命令でも受けたかの如く彼を震えあがらせたので病気にかゝって死亡したのである。私が述べたように、斯く二人の子息は健在である。その一人セリムは年長であるところから王位を継がせることになっていた。

バヤズイトは母〔ロクソナーナ〕の熱意と愛情という支持を有していた。母親として不可避的にバヤズイトを待ち受けている運命について憐んだためか、或いは母に対しての献身的な態度にほだされてか、或いは又何かほかの理由で彼女の心を捉えたかどちらかである。もしも選択を迫られるならば、彼女はセリムよりもバヤズイトの方を択んで玉座に据えたことは確かに誰しもが疑いを容れぬところである。

だが父帝の希望は尊重されなければならない。さすれば父帝が逝去に臨んで、それをはっきり決定するならばセリムが帝位を継ぐことになろう。このことを知るバヤズイトは自身を待ち受けている運命から身をかわし、又死の代りに帝位を手に入れるために何らかの手段を常住求めている。ましてや母〔ロクソラーナ〕とリュステム〔パシヤ〕の支持とは彼に希望を与えている。玉座のために闘って死ぬことは、むしろ名誉であり、兄弟の手によっていけにえのための犠牲獣のように不名誉に殺害されるよりは、ましであると思っている。

そうした心境と既に明らさまとなったセリムとの対立のため、彼はムスタファの殺害によって高められた反感のうちに長い間抱いていたもくろみを実行に移す有利な機会を見出した。

（ビュスベックは、こゝでバヤズイトが、故シェフザーデ＝ムスタファになりすまして一五五四年にダニウブ諸州で反旗をひるがえしたデュズメジ〔偽王子〕ムスタファの要求を支持するように、どのように支持者たちを誘導したかについて縷述する）

シュレイマンは〔偽王子ムスタファの反乱が一種の陰謀であり〕この陰謀は二人の子息のうちの一人との関連なしには行われぬことを見抜いて容易ならぬ事態と重視した。

そこでスルタンは事態がこのように緊迫化するのを放置しておいて、当然なさねばならぬ筈のごく初期に処理しなかったことについてサンジャクベイたちを責問する書簡をしたゝめた。スルタンはサンジャクベイらに対し、偽ムスタファを鎖でつないで、このいまわしい陰謀に加担した他の共謀者と共に直ちに自分の面前に差出さなければ重大なる結果になると威嚇した。それのみならず、彼らに援助を与えるためスルタンは警護の大部隊をつけて大臣格のペルテウ＝パシヤ（上述シェフザーデのメフメットの寡婦と結婚した）を派遣した。

とはいえ、もしもサンジャクベイらが自分らの身のあたしを立てたければ、この援助部隊が到着する以前にみずからの

手で事を処理する必要がある。

（以下トルコ語訳文より補足）

ペルテウの側にある部隊は決して数多くはなかった。たゞし選ばれた兵士を以って構成されており、勇敢にして献身的な強者（つわもの）共であった。シュレイマンの側近にある者ですべて将校をえらび出したかの如く思われるのである。

急遽派遣される兵は、叛徒の側に寝返える可能性も考えられた。というのはイエニ＝チェリに至ってはムスタファという名前を聞いただけで叛徒に好感を寄せるおそれがあったからである。

（陳述は以下につゞく）

シュレイマンの命令を受け取ると直ちにサンジャクベイたちは懸命になって事を処理しなければならないと感じ、お互に打ち合わせて火急に仕事に着手した。偽ムスタファの反乱計画を行詰まらせ反対することに専念したのである。今やサンジャクベイたちは、自分たちが偽ムスタファのために募集しつゝあった部隊を解散し、すでに集まった部隊は分散させるために最善の努力を払う一方、危険がさし迫っていると威嚇して恐怖の念を広くばらまいた。かゝる一方ペルテウ＝パシヤの軍団は進軍しつゝあった。彼らが反乱の現場から程遠くない地点にまで到着すると、突然胆をひやした訓練の足りない部隊が示すあたり前の態度なのだが、偽ムスタファ側の兵士たちは周辺をぐるりと取り巻かれていることに気付いて恐慌に襲われた。まず少数の兵が浮き足をたてた。しかも結局、名誉と約束とを忘れて彼らはすべて指導者を見捨て算を乱して逃走した。

偽ムスタファは幕僚及び顧問たちと共に、ひとしく逃亡を計ったが、サンジャクベイらに行く手を阻まれて逃げ場を失い生擒りにされてしまった。すべての捕虜はペルテウ＝パシヤに引き渡され、選抜部隊が附き添ってイスタンブールに護

送された。シュレイマンは彼らを拷問にかけてきびしく糾明し、知りたいことをすべて知った。スルタンはバヤズイトの罪状と、彼のすべての計画を知ったのである。それによると、叛徒が充分な兵力を集めると直ちにバヤズイト自身が大部隊をひきいてこれに合流し、状況の示すところでは、彼らを直接イスタンブールに向けて誘導するか、さもなければ兄弟〔セリム〕に対して不意討ちを掛けるために叛徒を利用するのが意図であったことが明白となった。とはいえ、彼がためらったために計画が熟する前にスルタンの機敏な行為で阻止されてしまったのである。

必要とする一切の情報を入手したシュレイマンは捕虜たちを真夜中に海中に投じて溺死させるように命じた。というのは、如何なる事情にもせよ、外部を騒がしたこと、ないしは自分の家庭の紛糾が近隣の支配者の目の前にさらされたことは得策でないと判断したからである。シュレイマンはバヤズイトに対してひどく立腹していた。どのように彼を所罰すべきかを考えていた。しかも妻たる王妃は、頭のよさでスルタンの考えを容易に見抜いたのである。スルタンの激怒を鎮めるため数日の間をおいて、彼女はスルタンの面前にてこの問題に触れ、若輩の無分別、運命の避け難いことなど事こまかに話しかけ、またトルコの古い歴史から類似の出来事を指摘した。

彼女は、彼が自身のため、又家族のために最善を尽すのは、一個の男子としてごく自然の本能であり、すべての人間はひとしく死を避けたがっていること、また若い男は、よこしまな側近者のために容易に義務と廉直から逸脱することなどを指摘した。最初の非行は容赦するのが公正であること、もしも息子がその方法を改めるならば、父は息子の生命を救けることによって得る所は大きいであろう。もしも反対に息子が再度非行を重ねるならば、その時こそ彼を所罰してもおそくはあるまいと彼女は申しのべた。彼女は、もしも息子に憐れみを掛けないならば、自分の息子のために命乞いをする母親に憐れみを掛けて欲しいと嘆願した。涙乍らに愛撫こもごも交えたこのような言葉でシュレイマンの気持は、すっかりなごんだ。いつもながら妃からの強い影響で譲歩したのであり、出頭して直き〴〵に命令を受けることを条件にバヤズイ

トを助命しようと決心した。

（…以下トルコ語訳本からの補足）

ロクソラーナは仲裁に立った結果について非常に満足した。機会を失しなかったからである。彼女はバヤズイトに書簡を書いて、自身で直きぢかに出頭するならば父帝の面前に出ても決して危険はないと知らせた。何となれば彼女自身、下準備をしておいたからである。

父の心境について、このような吉報を受けるとバヤズイトは、父帝の言葉を信じようと決意した。にもかゝわらず内心では恐怖心を抱いていた。兄のムスタファのことが頭のうちにあったからである。彼が如何にして危険にさらされたかという先例が目の前にちらついていた。だが恐怖に打ち勝って父帝から指定された場処に赴いた。そこは〝ジャレストラネ〟と呼ばれる地点で、イスタンブールから数マイル離れていた。

今日（十六世紀中葉）のトルコ帝国の慣習によるとシェフザーデが成長して後は、如何なる時でもイスタンブールの城門の中では決して徒歩では歩かなかった。兵士たちを迷わせ勤務の遂行が出来なくなるため慣習となったのである。

バヤズイトは馬から降りると、父の奉仕者たちは若干の武器や短剣を取りあげるために走り寄ってきた。これは彼が有罪であるとの意識があって恐怖の念を抱いていたためである。

とはいえ他の者に対してもこのような措置が取られたことを確認するのが慣わしであった。皇帝の面前へは武器なしで伺候させられたのである。息子が通りすぎる道筋にあって母后は窓から息子を眺めて、励ましのまなざしを投げかけた。このことでバヤズイトは再び勇気を取り戻した。

（陳述は以下につゞく）

さて父帝の面前にあらわれると直ちに、老スルタンは、バヤズイトに傍に坐るように命じて、彼自身が攻撃目標になる惧れのある状態にあって敢えて武器を取るといった軽卒な行為をきびしく叱責しはじめた。その計画は、兄弟相喰むものですらあって、その行為は極悪罪科に価いするときめつけた。お前は、イスラム信仰の唯一の残されている護教者であるオスマン王家の権力を、家族の確執を通じて危険におとしいれ、信仰の真の基礎を根こそぎにするために全力を尽した。お前は、今後、社会不安を惹き起したり、罪のない兄を挑発することをやめ、又、老齢の父の心の安静をかき乱すことを慎しむべきである。

もしもお前が再度非行を重ね、新らしい嵐をまきおこすことにでもなれば自分の首を刎ねる結果になろう。第二の罪科に対しては容赦しないであろう。お前は親切な父親でなく最も厳しい裁判官を思い出すことになろうと云った。この言葉を聞いてバヤズイトは、短い適切な返事をして過失を弁明するというよりは、むしろ懇願の形で、将来父の権威に対して従順であることを約束した。

茲でシュレイマンは、いつものシェルベット〔砂糖と水、それにさまざまの果汁をまぜたもの〕を持ってこさせ、息子に飲ませた。バヤズイトは飲むことを辞退したかったのであるが、あえて断りもせず、体裁を取りつくろって飲みたいだけ飲んだ。だが、これがこの世の最後の飲物となりはしないかと非常に惧れていた。だが父帝は同じ杯から飲んでみせて彼の不安を取り除いて呉れた。

バヤズイトは父との会見において、上述のムスタファよりは、遙かに幸福であり、自分の政庁の所在地に帰っていった…」とある。

なお又、一五六〇年七月一日コンスタンティノープルからのビュズベックの第三信は、このバヤズイトが再度、父帝と仲たがいしてイランに亡命する経緯に触れている。

この長文の書簡から汲みとれる事項としては

(1) エウレヤ＝チェレビイによると王子ジハンギルは常住父シュレイマンに影の如く附き添っていたらしいがビュズベックによると、この王子は背骨が彎曲しており自分が殺害されはしまいかということで異常なノイローゼに罹り前述ムスタファ事件でショック死した事情。

(2) ハレムの美しい妖婦として自他共に許すロクソラーナに就いても巧みな性格描写ないしデリケートな心理描写をしており、我が子に対しては並々ならぬ献身的な愛情を示して憚らなかった事情。

(3) 彼女が巧言令色を以って大帝王シュレイマンを籠絡し手玉に取っていること。

(4) バヤズイトが、父帝によって処刑された異母兄ムスタファに酷似する人物を探しあてゝ、本物のムスタファの如く取りつくろい、ルメリ方面で反乱の中心人物に仕てた。いわゆる偽ムスタファ（ドユスメジ）の事件についても、スルタンの心理的な焦燥感やこれに対する事後措置についても可成り克明に伝えていること。

などである。

七

以上、史実考証よりは資料紹介に終始した感があるが、第三者的な外国人の観察という観点から眺めれば、まさしくトルコ史に関する限り傍証資料の枠を出てない。だが「ビュズベック書簡」は、可成り鋭い洞察眼を以ってオスマン宮廷内部に発生した裏面史的な事態を事細かに観察しており、客観性という点でオスマン資料を補足して余りあると云える。

瑣末な誤解点が見出されるとはいえ、そのような特色があればこそ、ビュズベックの見解は、現代トルコ史学界を承服するに足り、その所説が採用されているのである。例えば民間学派ともいうべきムスタファ＝ジェザール監修、修史委員

会編『詳述オスマン史』(Mustafa Cezar. Resimli-Haritalı. Mufassal Osmanlı Tarihi Cilt 2. İstanbul, 1956-1963)ないしは、イルマズ＝ヨズトナの『トルコ史』(T. Yılmaz Öztuna: Türkiye Tarihi, Cilt, 5-6 İstanbul 1964-65.)の如き著作、さらに、より学術的な論考としては、アンカラ大学シェラフェティン＝トウラン教授の『シュレイマン大帝の王子バヤズイトの反乱』(上掲)の如き、本格的な史実考証を駆使した労作にもビユズベック書簡が利用されている所以である。

（前嶋先生の御健勝を祈りて擱筆）